

東洋學報 第七十九卷第四号 平成十年三月

論説

駙馬高麗国王の成立

——元朝における高麗王の地位についての予備的考察——

森 平 雅 彦

一 はじめに

一二五九年、高麗はあしかけ二九年にわたる抵抗のすえモンゴルへの帰服を決し、王太子僖（後の元宗）を降使として遣わした。折しも大カアンの憲宗モンケは南宋攻略の陣中に急死し、僖は末弟アリクブケと大カアン位を争う皇弟クビライ（後の世祖）のもとに投じた。結果、同国は以後およそ一〇〇年にわたり、その政権である元朝⁽¹⁾に服属して、それとの緊密な政治関係のもとで史的展開をとげることになる。

この間、忠烈王から恭愍王にいたる歴代ほとんどの高麗王が元朝の大カアン家の公主を娶り、その駙馬^{グレイケシ}となったことは、すでによく知られた事実である。「元史」卷一〇八、諸王表によると、まさに当時の高麗王は、最高ラン

クの金印獸鈕が与えられる諸王・駙馬のひとつ「駙馬高麗國王」として位置づけられている。

これらの事柄は両国の国家関係を考える際には当然ながら注目され、元朝の高麗に対する支配統制策の一齣として、また元朝の政治秩序内における高麗の地位上昇を示すものとして論じられてきた。⁽²⁾しかしこれまでのところ、その具体的な内容、とくに制度面に関する実証的な把握は必ずしも十分ではなく、上記のような抽象レベルのイメージばかりが先行しがちであることも否めない。こうしたことは、両国関係の具体的な構造、とくに元朝の国家体制における高麗の位置づけについて、いまだ体系的な理解が深められていないことの要因にもつながっているとおもわれる。私はこうした状況をふまえ、さしあたり当時の高麗王をとりまく制度的な環境について、逐一の解明をめざしているが、もつとも根本的な属性である駙馬高麗國王という地位そのものに対する理解は、なかでも緊要な課題であると考ええる。

そこで本稿では、まず、高麗王家に公主が降嫁され、駙馬高麗國王という王号が成立するまでの経緯をできるだけ実証的に明らかにし、あわせてその制度的な基本性格について論及したいとおもう。いずれも、駙馬高麗國王の史的性格を追究していくうえで大前提となる、初歩的な事実関係の確認を目的とするものである。

二 公主降嫁をめぐる高麗王家の率先帰服

モンゴルの大カアン家はふつう特定の姻族^{インゾク}を通婚の対象としていたが、高麗王家に対する公主降嫁の由来を考える前提として、まず他の駙馬家に関するそれをうかがってみよう。オンギラトのような来歴の古い姻族については

必ずしも明示的でないが、太祖チンギス以降、新たに駙馬となったものについては、『元朝秘史』につぎのような記載がある。⁽³⁾

「クビライ・ノヤンをカルグ族に出征させた。カルグ族のアルスラン汗はクビライに投降してきたのだった。

(中略) 手むかわなかった、と云つて、チンギス可汗はアルスランを嘉して、娘を与えよう、と(云つて) 勅した」
(第三五節)。

「ウイグル族のイドウッドは、チンギス可汗に使者を送った。アドキラグ、ダルバイ二人の使者をもつて奏上し来るのに、雲が晴れて母なる太陽を見たように、氷がなくなり河水を得たように、チンギス可汗の名声を聞いて非常に喜んでゐる。チンギス可汗が嘉赦下されば、黄金の帯の輪環から(何がしかを)、真紅の衣服の一片から(何がしかを) 得るならば、五番目の子(↑貴方の) なつて力を与えたい、と(云つて) 奏上して来た。その言葉にチンギス可汗は嘉赦し、返答を言つて遣るのに、娘をぞ与えよう、五番目の子になるよう。(中略) と(云つて) 遣れば(下略)」(第三八節)。

「兔の年にヂヨチを右翼の兵達を伴つて森の人衆の処に出馬させた。ブカが土地案内して行つた。オイラド族のクドウガ・ベキは万のオイラド族の前に帰順してきた。(中略) オイラド族のクドウガ・ベキを迎えて、前に服して万のオイラド族(↑自分の) を引き連れてきた、と云つて嘉賞して、子に(↑彼の) イナルチにチエチエイゲンをあたえた。イナルチの兄トルチにヂヨチの娘のホルイカンを与えた」(第三九節)。

このように、カルグ・ウイグル・オイラドの君主は、いずれも率先してモンゴルに帰服してきたことに対する

報ソウルガル獎として公主の降嫁をうけ、駙馬になったという。⁽⁴⁾ ウィグルとオイラドについては、ラシード・ウッディーン『モンゴル史』の当該部族誌にも、ほぼ同様な趣旨の記載がみられる。⁽⁵⁾

もつとも、この率先帰服という謂いには多分に名目的な部分もあったらしい。かつてクトウガ・ベキは太祖に敵対するジャムカやナイマンにくみしていたし、⁽⁶⁾ また後掲するように、『元史』には、世祖がカルグについて帰服が遅れたものと述べた記事がある。そもそもモンゴルで通婚関係と政治的な同盟関係（アング）⁽⁷⁾ 年には密接な相関関係があった。公主降嫁とは、基本的には他の勢力を自陣にとりこむ政略にもつながっており、率先帰服の功績とは一種の方便とみてよからう。とはいえ、公主降嫁は公式には大カアンから賜る報ソウルガル獎に違いないのであり、その際もつばら事由として喧伝されたのは、上記の率先帰服の功績だったのである。

以上をふまえて、つぎに高麗王家に対する公主降嫁についてみると、やはり同様に説明されていることが知られる。典型例として、李齊賢『益齋乱藁』卷六、同崔松坡贈元郎中書では、忠肅王七年（延祐七年、一三三〇）に英宗シディバラによって吐蕃に流配された忠宣王を并護するなか、つぎのように述べられている。

（上略）竊惟、弊邑事大以來百有餘歲、歲修職貢、未嘗少弛。往者、有遼氏阜孽金山王子者、驅掠中原之民、弄兵于海。朝廷遣哈眞・扎刺師師討罪、天寒雪深、甬道不繼、軍不得前却、幾爲凶徒笑。我忠憲王命趙冲・金就礪、轉餉濟師、犄角而滅之。兩國之師相與約爲兄弟、誓萬世無相忘。是則弊邑盡力於太祖皇帝時也。世祖皇帝南征而返、將繼大統時、有介弟扇變于朔方。諸侯憂疑、道路甚梗。我忠敬王以世子率羣臣、拜迎于梁楚之郊。天下、於是覩遠人之悅服、知天命之有歸。是則弊邑盡忠於世祖皇帝者也。忠敬王襲爵東歸、忠烈王復以世子入

侍輦轂。世祖念其功、嘉其義、眷遇深至、天下莫及、令尙公主、以示殊恩、屢頒詔旨、毋改舊俗。四海之内、稱爲美談。(下略)

「忠憲王」すなわち高宗が太祖チンギスを助けたというのは、モンゴルに背いて高麗領内に闖入した契丹の一勢力を、太祖が哈真・扎刺に命じて追討させた際、高麗側が趙沖・金就礪を遣わしてこれを助勢した、高宗五年(太祖十三年、一二二八)の事件をいう。これがモンゴルと高麗の最初の接触であり、しばらくは平和裡に交渉が行なわれた。しかし、六年後にモンゴル使節が遭難したことをきっかけに国交は断絶し、高宗一八年(太宗オゴデイ三年、一二三二)にいたり、モンゴル軍による高麗侵攻が開始されるのである。

「忠敬王」すなわち元宗が世祖に忠をつくしたというのは、一二五九年の憲宗モンケの死後、降使としてそのもとにむかうはずだった元宗(当時、王太子)が、即位前夜の世祖クビライのもとに投じた、本稿の冒頭でもふれた事件をいつている。当時アリクブケと大カアン位を争っていた世祖はこれを奇貨として受けいれ、死亡した高宗にかわる高麗の新国王として冊立し、以後、高麗は元朝に服属することになるのである。

また忠烈王が「世子」として「輦轂」に「入侍」したというのは、元宗一二年(至元八年、一二七二)に同王が質子として世祖のもとに赴いたことをさす。⁽⁸⁾

李齊賢は以上を公主降嫁の事由につながる高麗王家の功績とするわけである。忠宣王の流配という事件に際しては、他の議論においても同様な論理が用いられている。⁽⁹⁾

うち忠烈王に関する件は、後述するように公主降嫁は元宗一〇年の段階ですでに話が持ち上がっており、その正

式承認はほかならぬ元宗一二年であるから、公主降嫁が検討されるにいたる直接の事由とはなり得ない。基本的には、実際の公主降嫁が元宗一五年であつたことに対応する、後づけの論理とおもわれる。¹⁰⁾

これに対し、太祖や世祖に対する貢献とは公主降嫁にはるかに先立つ事件であるゆえ、その直接の事由としては妥当であるかにみえる。実際、「顧惟、弊邑服我大邦、敵愾攻遼、助聖武（＝太祖）東征之旅、觀光過汴、迎世皇（＝世祖）北上之師、遂蒙釐降之榮」（『益齋亂藁』卷八、乞比色目表。なお（＝）は森平による注釈。以下同じ）、「臣之先臣植（＝元宗）、於蒙哥皇帝已未歲、以世子入覲。時世祖皇帝回自征南、先臣具袍笏、迎拜于汴梁之墟。世祖嘉嘆、寵暉日隆、至於小臣（＝忠烈王）、釐降公主、世爲東藩」（『高麗史』卷三一、忠烈王世家、同王二十三年二月己亥）とあることをはじめ、これらを取りあげるのがむしろ一般的である。元朝側の認識としても、武宗カイシャンが忠烈王妃忽都魯揭里迷失公主を追爵した際に「由其先有功於太祖、許帝室以連姻」としており（『高麗史』卷三三、忠宣王世家、同王二年七月乙未）、朱德潤『存復齋集』卷七、祭太尉藩王（＝忠宣王）文にも「自世祖神武皇帝經營四方、赫赫皇皇、中土既平、無遠弗届、無人不將。于時、先王（＝元宗）挈國內附、相平遼荒。爰降帝女、式配于京、篤生賢王、克孝克勤」とある。

そしてこれらのことは、ともに、高麗がモンゴルに率先帰服したことを意味するものと、たしかに考えられている。崔滄「拙藁千百」卷一、送盧教授西帰序には、「天子、以東國首先嚮化、世許尙主」とあるが（傍点は森平。以下同じ）、元朝の官人王観は「高麗慕義向化、歸順聖朝、百餘年矣。世世相承、不失臣節。世祖皇帝嘉其忠懇、妻以帝女、位同親王。寵錫之隆、莫與爲比」と述べている（『高麗史』卷二二五、柳清臣伝）。『益齋亂藁』卷八、陳情表に

も「伏念、自聖朝奮義而肇基、惟小國向風而先服、助威討賊、遏遼民狼顧之謀、冒險迎師、贊世祖龍興之業。由是、講甥舅之親、而委以保釐之位」とあるほか、忠宣王は忠肅王八年に高麗の耆老にあてた書のなかで「以高王之於聖武、元王之於世皇、率先歸附、佐運樹功、先考忠烈王得尙公主」と述べている。⁽¹¹⁾

しかし以上はいずれも、世祖の息女である忽都魯揭里迷失公主が忠烈王にはじめて降嫁された元宗一五年（至元一一年、一二七四）よりかなり後、一二九〇年代以降の史料である。一方、降嫁以前の高麗に対する評価はまったく正反対であった。『元史』卷七、世祖本紀、至元七年二月乙未にはつぎのような世祖の言葉がみえている。

（上略）詔諭植（元宗）曰。汝内附在後、故班諸王下。我太祖時、亦都護先附、即令齒諸王上、阿思蘭後附、故班其下。卿宜知之。（下略）

後でもふれるように、至元六年に元宗は権臣林衍によっていったん廃されたが、元朝の意向でほどなく復位した。翌年事件の釈明のため来朝した元宗に対し、世祖は、率先帰服したウイグルの「亦都護」は諸王の上位に列せられたが、遅れたカルグの「阿思蘭」は諸王の下位であった、というエピソードを述べたのである。すなわち、高麗王もまた帰服が遅れて諸王の下位にある身であるから、立場をわきまえて行いを慎めとの謂いである。高麗は率先帰服どころか、逆に「後附」の怠慢を責められる立場であった。

高麗は実際、数十年にわたってモンゴルへの帰服を拒み続けたのであり、これはごく当然ともいえる。『高麗史節要』卷一七、高宗四五年（憲宗八年、一二五八）二月にはつぎのようにある。

遣將軍朴希實・趙文柱・散員朴天植等如蒙古、請達魯花赤曰。本國所以未盡事大之誠、徒以權臣擅政不樂內屬。

故爾今、崔瑄已死、即欲出水就陸、以聽上國之命。而天兵壓境、比之鼠穴爲猫所守、不敢出耳。

帰服を決した当初、高麗側に率先帰服を誘うような態度は微塵も存在しない。長年にわたる敵対行為の責任を権臣崔氏に帰しながらも、結果的に「本國」ぐるみでモンゴルに背いてきた事実を認めている。

元宗代はじめにおいても、『高麗史』卷二五、元宗世家、同王元年三月丁亥によれば、江淮宣撫使趙良弼は「高麗雖名小國、依阻山海、國家用兵二十餘年、尚未臣附」と述べており、同年四月丙午の条所載の世祖の書では「普天之下、未臣服者、惟爾國（＝高麗）與宋耳」とされている。また元朝の官人愛綏は、中統三年に仏事を大々的に行おうとした世祖を諫めるなかで、「方今、高麗新附、李壇復叛、淮海之壖、刁斗達旦」と述べたという（程文海『雪樓集』卷五、弘林忠獻王神道碑）。さらに当時の高麗は、「新附之國」の義務として、国王の親朝・質子の提出・戸口の登録・站赤ジャンチの設置・軍事協力・達魯花赤タルガチ（監督官）の設置の「六事」、および江華島から開京への還都を要求されていたのだが、これらを十分に実行せず、ついには元朝から服属を疑われるにいたつていた。⁽¹²⁾高麗を「新附」とする考えは、すでに公主が降嫁された後の忠烈王四年（至元一五年、一二七八）においても、東征元帥府の上言のなかに「高麗初服、民心未安」とあることから確認される。⁽¹³⁾

高麗が長年にわたる抵抗の事実を無視して、太祖チンギスとの最初の接触を率先帰服といいだすのは、史料によるかぎり忠烈王二〇年（至元三年、一二九四）が最初である。忠烈王はこの年即位したばかりの成宗テムルの下問に応え、高麗の帰服が太祖チンギス以来七六年になることを鄭可臣に上書させた。⁽¹⁴⁾この時なぜこれが行なわれたのかよくわからないが、⁽¹⁵⁾大カアン（15）の代がわりにともない、高麗の「後附」の国としての立場がかわり得る契機があっ

たわけで、この後、前述のような形で高麗の率先帰服がいわれるようになるのである。

かかる認識の変化は両国のいかなる思惑によるものだったのか、いまのところ史料から直接に知ることはできない。ただ、前掲した関係史料の多くがそうなのだが、率先帰服の功績とは、高麗が元朝に対して何らかの要求を行い、あるいはそれを擁護する際のよりどころとして、また高麗王家を顕彰する文脈において、述べたてられている。少なくとも結果として、元朝服属下における高麗の立場の向上につながっていることは疑いがない。しかしいづれにせよ、これは時間をかけて両国の間に成立してきた認識なのであり、高麗王家に公主が降嫁されるにいたった本来的な事由とみなすことはできないのである。

それどころか、帰服当初の高麗は、少なくとも率先帰服という建前からいえば、元朝にとつて公主降嫁にふさわしい相手ではなかったことになる。はじめて降嫁が行なわれた当時ですら、これを正当化するもつともな事由である上述の功績が認知されていなかったことは注目に値しよう。かかる状況において公主降嫁が実現した背景には、それ相應の事情が双方また別に存在していたとおもわれるのである。つぎにその点を検討する。

三 公主降嫁の事情

高麗王家に公主が降嫁されるまでの経緯については、高柄翊、金成俊、金惠苑、鄭容淑、蕭啓慶が論及している。⁽¹⁷⁾ いずれも、このことがはじめて持ち上がるにいたった時期については、時の権臣林衍が国王元宗と鋭く対立するにいたり、同王一〇年（至元六年、一二六九）六月に王を廃位した事件との関わりを指摘する。というのも、元朝の意

向で一月に元宗が復位した際、事件処理のため高麗に派遣された元使黒的が、「王太子」忠烈王に対する公主降嫁がすでに決定済みであることを、元宗に対しつぎのように告げているからである。

王宴黒的等、使坐上座。黒的等讓曰。今王太子已許尙帝女。我等帝之臣也。王乃帝駙馬大王之父也。何敢抗禮。王西向、我等北面、王南面、我等東面。王辭曰。天子之使、豈可下座。固辭、東西相對。（『高麗史』卷二六、元宗世家、同王二〇年一月癸亥）

ただし金成俊は、後に高麗側が再び降嫁を奏請した際、世祖がこれを拒絶したことから黒的の言の信憑性を疑い、林衍を牽制するための虚言であつたとしている。しかし、そのような政略性を認めつつ、ことの重大さからして降嫁の許可自体は事実であつたとする鄭容淑の見解のほうが、より穩当であろう。とはいえ、いずれの論者にしても、公主の降嫁が、いつ、いかにして持ち上がったのか、より嚴密かつ論証的には特定していない。この問題については、いまのところ唯一、つぎの『鄭仁卿墓誌銘』の一節が、具体的な情報を提供してくる⁽¹⁸⁾。

至至元六年己巳、今上（『忠烈王』親朝、公以攝校尉扈從。是年七月、還至婆娑府、聞林衍廢立事、欲還赴朝廷。左右侍從、不能無懷土之心、或勸涉鴨江。公確舉大義、奉乘輿、□至闕庭、先赴帝所、奏陳元王復位・釐降公主・遣兵討賊等數條事、一皆領。可此則万世之功也。

廢立事件勃発の翌七月、使行の帰途で鴨緑江下流右岸の婆娑府にあつた忠烈王のもとには靜州の官奴丁伍孚がおとずれ、事件の勃発を伝えたが、從臣の間では帰国を勧める者と慎重策を勧める者との意見がわかれた。そこで鄭仁卿が国内に潜入して情報を集め、また林衍が元朝に遣わした使者が捕らえられるなどして状況が把握される。そ

のうえで忠烈王は世祖のもとに引き返し、その助勢を請おうとしたという。⁽¹⁹⁾

上掲した墓誌銘の一節は以上の経緯を概述したもののだが、この時まっさきに世祖のもとに赴いた鄭仁卿が元宗の復位・公主の降嫁・林衍の討伐などを奏請し、みな承諾をうけたというくだりが注目される。

世祖は八月に忠烈王より事件の通報をうけ、ただちに塔朶思不花と李諤を高麗に遣わして元宗廢位の所以を質したが、翌九月には忠烈王に「特進上柱國」を与え、三〇〇〇の軍を授けて「國難」に赴かせるとした。また一〇月には、ジャライル国王頭輦哥を中心とした軍を發動し、高麗を威圧しつつ進攻に備えるとともに、黒的を高麗に派遣して林衍に元宗の復位を迫り、林衍はやむを得ずこれを受諾したのだった。⁽²⁰⁾

このように、鄭仁卿の奏請のうち、「元王復位」と「遣兵討賊」については直ちに実行されたことが確認される。「釐降公主」についても、「一皆領」とあることに一定の信憑性を認めてよいとおもわれる。すなわち、前述した黒的の発言はまさにこのことに由来するとすれば、自然な成り行きと了解されよう。公主降嫁を元朝側の発案とする見解もあるが、⁽²¹⁾元朝が事件に反応したのは忠烈王からの通報をうけてからとみられ、⁽²²⁾「鄭仁卿墓誌銘」によるかぎり、その通報とは鄭仁卿の奏請にほかならない。ゆえに公主の降嫁は、一二六九年の元宗廢立事件をきっかけに、おそらくは同年八月、まず忠烈王側から提案されたと考えられる。

とすれば、つぎなる疑問は忠烈王がこのような時期にこれを望んだ理由である。従来、公主降嫁は、高麗王にとつて、元朝の權威をバックに、崔氏・金俊・林衍と続いてきたいわゆる武臣（武人）政權を退け、国王権力を回復した意義がいわれている。⁽²³⁾以上の解釈については、いまのところ史料に基づいた論証が困難だが、元宗廢立事件に際

し、元朝の助勢を請うなかで降嫁が求められたことからみて、私としても基本的に異論はない。ただし、両国の間には、当時つぎのような問題があったことも指摘しなくてはならないだろう。

「至元六年、高麗權臣林衍叛」(『元史』卷一五四、洪福源伝付、洪俊奇伝)とあることをはじめ、元朝は林衍の元宗廢位を元朝に対する反乱と捉えていた。『高麗史』など関係史料にみるかぎり、元宗と林衍の対立は高麗政府内部のヘゲモニー争いのようである。しかし、世祖の冊封をうけていた元宗を許可なく廢位することは、世祖の威信を冒すものとうけとめられたのである。⁽²⁴⁾ しかもこの事件をめぐる、「麗國避兵江華島四十載。雖云臣貢、終莫肯出、致柄臣恃險擅王位」(張之翰『西巖集』卷一九、大元榮祿大夫中書平章政事趙公神道碑銘)、「今瀋王之祖(元宗)惑其令公林演(林衍)之說、而安其所、不以時徙」(姚燧『牧庵集』卷二四、軫運鹽使曹公神道碑)とあるように、元朝側では、林衍一身のみならず、国王以下、高麗総体の帰服如何の問題として捉えていたようである。前述のように、そもそも事件以前の段階で、国王親朝をはじめとする「六事」や開京還都など元朝側の諸要求を履行してこなかった高麗に対し、元朝はすでに不信感を表していたのである。⁽²⁵⁾

元宗廢立事件が勃発して以来、元朝の枢密院は高麗の処遇を検討しており、その結果は、至元六年一月二日の奏議として「元高麗紀事」につぎのようにみえている。まず馬亨の言からみてみよう。

臣亨謹奏皇帝陛下。高麗本箕子所封之地、漢晉皆爲郡縣。今雖來朝、其心難測。竊聞、先曾有旨、令量力出居陸地、至今不出。去歲、遣使和好(日)本、爲親仁善鄰之道。今高麗謀稱飾詞、有違上命。夫鄰國不知鄰國之事情者、未之有也。南宋見執郝經。今又遣使於日本、萬一逆上命、有失威重。後雖起兵、地限滄海、勝負難必。

故千鈞之弩、不爲鼷鼠而發。於今、不若嚴兵假道於高麗、以取日本爲名、乘勢可襲高麗、定爲郡縣、安撫其民。可爲逆取順守、就用本國戰船・器械・軍旅、兼守南宋之要路、缺日本往還之事情、此萬全之勢也。今遲之、恐聚兵於島嶼、積糧於海內、廣被固守、不能搖矣。此不可不察也。

すなわち、江華島から還都せず、日本への遣使を行った際も態度が欺瞞的であつた高麗には信がおけないとし、日本攻略を名目として高麗に兵をいれ、平定して郡県となし、その人的・物的資源を南宋や日本の経略に利用することを勧めたのである。しかし馬亨は、時期が遅れると高麗は準備を整えて海島に立てこもつてしまい、容易には攻略できなくなると強硬策の不利を指摘し、つぎのような対処を述べた。

今既に覺端、不宜動兵伐之。動而得勝、亦不爲善。萬一不勝、上損國家之威、下損士卒之力。彼恃江山之險阻、積糧於海內、謹守不動、何計取之。今高麗有十年之銳、恐朝廷攻伐日本、必有滅號之心、又節次有違上命之罪、深不自安、如履薄冰。所以無故而待動也。今若發兵、如虎入山、抱薪而救火。此實不可爲也。亨謂。如有來進表文所告情節、即宜遣使寬赦其罪、減免進奉、安撫其民社。仍召執政者二人、至則數南宋之罪惡、欲與戮力一心、同聲伐罪。所遣使於日本、爲親仁善鄰之道。亦是此意、宜以語。溫恤其來者、庶幾感慕聖旨、以大舉。待南宋已平、再審他志、迴兵誅之、亦未爲晚。是一舉而兩得也。可爲全勝之策。今便發兵、彼亦以兵應我。是生一敵國也。

すなわち、いま高麗は元朝側の出方ひとつで離反にいたる瀬戸際にたっているゆえ、高麗側が折れてきたならばこれを赦し、所領を安堵すれば、南宋や日本に対する経略にもよろこんで協力するだろうという。そして、南宋を

平定したのち、高麗になお異志があれば、その時あらためて討伐すればよく、いま新たな敵国を生じるのは得策ではないとするのである。つづいて前枢密院經歷馬希驥はつぎのように述べた。

今之高麗、乃古新羅・百濟・高句麗三國併而爲一也。大抵、藩鎮權分、則易制、諸侯強盛、則難臣、古今之通義也。曩者、詔命遣信使、垂恩於日本、陰謀沮壞、遷居民捨水而就陸、亦不聽從。此時、亦易有恃山水之固、自爲強大、抗拒之萌、已見矣。蓋臣下權太重故也。近者、不請上國擅自廢立、法當不容。然治遠邦者、不牽於常制。安反側者、務要於從權。今者小國事、已如斯矣。我朝誠宜熟議。希驥以謂。若釋罪、就封上國、不爲姑息之政。或興兵致討、三軍恐無全勝之功。合無兩釋、取其酌中、止鞠廢立謀臣之一夫、赦註誤諸人之重罪、驗彼州城軍民多寡、離而爲二分、治其國、使權侔勢等自相維制、則我國徐議良圖、易爲區處耳。如是、則彼人人必懷聖朝寬宥之大恩、其國不削而自弱矣。昔漢之主父偃削諸侯權、是其議也。況高麗邊陲殘類、海嶼遠方、不聞朝廷之聲教久矣。宜從寬恕、許令自新、亦我上國懷遠安邊勝殘去殺之意也。今倘捨此而不爲、或以威力追召、或以積兵進取、萬一小國權臣恣凶作逆、阻山恃水、與宋連衡、拒守海嶼、我聖朝雖有雄兵百萬、未可以歲月下之、甚非大國之利也。(下略)

馬希驥もまた馬亨と同様な理由で高麗には信がおけないとするが、攻略の困難に加え、南宋との連合をも危惧して強硬策を不可とし、廢立事件首謀者のみの処罰でこれを赦すのがよいとした。ただし、彼は服属国が大きな勢力をもつのはよろしくないとし、高麗の所領を二分すればこれを統御しやすくなるとした。

以上のように元朝は、武力制圧による高麗の直轄郡県化から、いったん懐柔したうえでの様子見、所領の分割ま

で、硬軟さまざまな対応を考慮していたのである。その意味では、このとき高麗は実に存亡の危機にたたされていたといっても過言ではない。高麗の態度に対する元朝側の問責があいつぐなか、交渉の第一線にあつた忠烈王には、元朝側で上記のような論議がおこることは十分に予測できたはずである。そのようななか、公主降嫁という破格の優待をみずから奏請するということは、ある意味では僭越ともいふべき意表をついた行為であらう。しかし、忽都魯揭里迷失公主が降嫁された際、開京の父老は「不圖、百年鋒鏑之餘、復見太平之期」と相い慶んだといふ⁽²⁶⁾。公主降嫁の由来を伝える前掲の諸史料からもうかがわれるように、やはり公主降嫁の意義については、高麗と元朝の關係を大きく好転させたことが一義的に捉えられなくてはなるまい。

したがって、忠烈王がこれを奏請した意図としては、元朝に対する積極的な服属、親和の姿勢を示し、その駙馬としての地位を得ることで、元朝との關係において当時危殆に瀕していた高麗王家の保全をはかること、この点を見逃すことはできないのである。

つぎに、元朝が公主降嫁を許可した理由について検討しよう。ただし、これを直接に語る史料がみあたらないので、元宗廃立事件に際して元朝側が考慮した案件から、間接的ながらうかがってみることにする。

まず枢密院は、強硬策をさけ、林衍の罪は問うが高麗そのものは懷柔する方針を提案した。至元七年正月と二月に高麗にむけて発せられた世祖の詔諭ではたしかにそのような意志が表明されている⁽²⁷⁾。同じころ、復位後まもない元宗は廃立事件の釈明のため元朝に赴いたが、召喚にもかかわらず林衍はしたがわなかった。ほどなく林衍は病死するが、子の惟茂が勢力基盤をひきつぎ、元宗の帰国とともに元軍が進駐するにおよび、叛意を明らかにした。し

かし林惟茂は宮中の廷臣により殺害され、国王が実権を回復する。その後も林氏麾下の三別抄軍が抵抗を続けたが、事態はおおむね元朝側の筋書きどおりに推移したといえる。

馬亨や馬希驥の言によると、彼らはまず高麗攻略の困難さを考慮している。地形の險阻をたのみ、海島にたてこもる高麗は容易に攻略しがたい敵手として認識されている。過去の数十年におよぶ高麗のモンゴルに対する抵抗が、高麗側の軍事的な力量にどれだけよっているかどうかは別として、少なくともこの当時において、元朝政府の首脳はそのような印象をもっていたのである。

さらに彼らは南宋の存在についても考慮している。至元五年九月、元軍は南宋の最前線である襄陽・樊城方面に進出し、ここにあしかけ六年におよぶ包囲戦が開始される。元宗廢立事件は元朝が南宋に対する本格的な攻略に着手した矢先の出来事だった。馬亨が高麗の人的・物的資源の南宋経略への利用を勧め、馬希驥が高麗と南宋の連合を恐れた背景には、そのようなさししまった事情があつたことになる。とくに、高麗に異志あれば南宋平定のあとで問罪しようという馬亨の言よりすれば、敵手として高麗の軍事力を重大視し、また高麗をさしあたって敵に回したくないというのも、ひとえに南宋という存在があつたことだったことがわかる。

また馬亨は日本の経略に高麗を利用することについてもふれている。至元三年以来、元朝は高麗を対日本交渉に利用しており、このうち日本攻略の助勢は高麗にとつて緊要な政策課題のひとつとなる。従来このことは元朝が高麗の存続を許した主要な理由とみなされてきたが、²³²それなりに自然な解釈ではあろう。ただし馬亨その人によれば、高麗をとりつぶしてその人的・物的資源を利用するという選択もあり得たのであり、元宗廢立事件に関するかぎり、

高麗の存続を認める理由として、必ずしも十分条件ではなかったようである。

なお至元六年は、オゴデイ家・チャガタイ家・ジョチ家の反クビライ勢力が、中央アジアでいわゆるタラスの会盟を行った年でもある。しかし史料にみるかぎり、この方面の情勢が考慮された形跡はない。

以上のように、元宗廢立事件に際して元朝は、対南宋戦とのかねあいを中心に、日本の経略なども考慮にいれつつ、抵抗があなどれない高麗に対する強硬策を不利と判断し、その存続を選んだものと考えられる。⁽²⁹⁾そこで元朝は、高麗の服属を安定させるため、忠烈王の要請をうけいれ、公主降嫁による同王家の懐柔および後援という方策をとったのであろう。この点で元朝と高麗王家の利害が一致したのである。元朝は服属国の君主家すべてに公主を降嫁したわけではなく、高麗の政治的な重みは、この時それだけ高く評価されたといえよう。

ただし裏返していえば、高麗にはそれだけ服属の安定が求められたということでもあった。この時点での降嫁の許可はあくまで当座の処置だったようで、ただちに実行されたわけではない。元宗十一年（至元七年、一二七〇）二月、廢立事件の釈明のため元朝に赴いた元宗はあらためて公主降嫁を請うたが、かかる重要事を「他事に因」って奏請するのは問題であり、「還國」して「百姓を撫存」したうえで「特に遣使」して奏請するようにと拒絶された。⁽³⁰⁾當時はまだ江華島に林衍の勢力があったわけで、高麗情勢の鎮静化が公主降嫁の前提であったことがうかがわれる。その後、国王権力が回復した高麗では、元朝の達魯花赤と屯田経略司が進駐して内政に介在し、また開京への還都・質子の派遣・站赤の設置・日本攻略の助勢などが段階的に実施にうつされ、高麗は数年のうちに元朝側のかねてからの要求をほぼ充足するにいたる。⁽³¹⁾元宗二十二年正月、同王は再び公主降嫁を奏請したが、その表文でも前提として

開京還都の完了が報じられている。⁽³²⁾そして同年一〇月には降嫁の許可が高麗に伝えられるが、⁽³³⁾実際に忽都魯揭里迷失公主が忠烈王に降嫁されたのは、元宗一五年五月のことであつた。⁽³⁴⁾濟州島を拠点とした三別抄軍の抵抗が前年よりやく鎮定され、第一次日本攻略の実施を目前にひかえた時期であるが、おそらくこの段階にいたり、高麗の服属は確実になつたものと判断されたのであろう。⁽³⁵⁾

四 駙馬から駙馬高麗国王へ

元宗は同王一五年（至元一二年、一二七四）六月に死亡し、公主を降嫁されてまもない忠烈王が即位することになった。かくして高麗王は世祖の駙馬としてきわめて高い政治的地位を得たかのである。ところが、忠烈王が即位する際、つぎのようなことがおこっている。

以便服・阜鞋幸本闕、更備袍笏、受詔于康安殿。其詔曰。國王在日、屢言世子可以承替。今命世子承襲國王勾當、凡在所屬、竝聽節制。王受詔畢、謁景靈殿、還御康安殿、服黃袍卽位、受羣臣朝賀、仍宴詔使。詔使、以王駙馬、推王南面、詔使東向、達魯花赤西嚮坐。王行酒、詔使拜受、飲訖又拜。達魯花赤立飲不拜。詔使曰。王天子之駙馬也。老子何敢如是。吾等還奏、汝得無罪耶。荅曰。公主不在、且此先王時禮耳。（「高麗史」卷二八、忠烈王世家、元宗一五年八月己巳）

宴席上、王の行酒の際、詔使は忠烈王を駙馬の礼でもって遇したが、つぎに達魯花赤は、「先王」元宗の時の作法を用いて忠烈王の駙馬としての立場をないがしろにしたという。すなわち、このとき忠烈王に関しては、それま

での高麗王としての格式と駙馬としての格式との間に、ある種のずれがあったことがわかる。

このずれについて、つぎに上掲記事にみえる宴席での席次から考えてみたい。周知のように、古来中国では序列を可視的に表現する礼制として席次が重視されてきた。元朝の礼制も歴代中国のそれを参酌して整えられたようだが、宴席などではモンゴル固有の慣習も多く残していたという³⁶。しかし多くの内容がまだ詳らかではないので、ひとまず中国のアナロジーによる意味解釈はひかえ、席次の序列性にのみ焦点をあてる。

そこで上掲記事に戻ると、駙馬として南面に推された忠烈王がもつとも優位であるのはいうまでもないとして、次位が東面した詔使、次々位が西面した達魯花赤であることは、両者の政治的地位や忠烈王による行酒の順番からしても間違いないだろう。また『高麗史』卷三八、恭愍王世家、同王四年八月癸亥にも

元皇太子遣月魯帖木兒來、宴榮安王^{（元）}大夫人。王幸其第。王與李氏^{（元）}竝南面、皇后弟趙希冲妻坐東、奇轍與月魯帖木兒坐西、宰樞坐階上。

とある。皇太子アユルシリダラを生んだ順帝トゴンテムルの皇后奇氏は高麗人で、その亡父奇子敖は榮安王に封じられた。皇太子が月魯帖木兒を遣わして奇子敖の妻李氏（榮安王大夫人）を宴した際、彼女は恭愍王とともに南面した。東には奇皇后の弟趙希冲の妻が座し（西面）、皇后の兄弟で奇氏一族の中心人物である奇轍は月魯帖木兒とともに西に座した（東面）。一四世紀半ばのこの事例においても、関係人物の政治的地位や宴席での立場からみて、南面した恭愍王等を最高として、東面、西面の順に優位であったと考えられる。

さらに、前掲した『高麗史』卷二六、元宗世家、同王一〇年十一月癸亥の記事には

王宴黑的等、使坐上座。黑的等讓曰。今王太子已許尙帝女。我等帝之臣也。王乃帝駙馬大王之父也。何敢抗禮。王西向、我等北面、王南面、我等東面。王辭曰。天子之使、豈可下座。固辭、東西相對。

とあった。元使黑的は、駙馬の父である元宗は上座につくべきであるとし、王が西面するならみずからは北面し、王が南面するならみずからは東面するとした。このうち後者は忠烈王即位時の宴席で実際に詔使がとった席次である。そして、北面は西面よりも下位になるわけで、四面のうち最下位となる。

ところが元宗と黑的の事例で問題となるのは、元宗が帝使の上座につくのは僭越と固辞したため、結局、両者が東西に対したということである。中国においてかかる席次は、南北に対する君臣関係のような絶対的な上下関係ではなく、賓主関係の表現である。⁽³⁷⁾元宗と黑的の場合も、たがいに相手を上座にすえ、下座におくまいとした揚げ句の折衷であるから、どちらが東西いずれに座したかは不明であるものの、ともかく対等性の強い関係表現とみる分にはさしつかえあるまい。

後述するように、元宗代から忠烈王代ははじめにかけて、元朝の朝臣と高麗王の席次は、結局この東西に対する形式がとられていたらしい。忠烈王は即位後、元朝と同名になる官制や「太子」「聖旨」などの用語をあらため、駙馬としての地位に即して僭越がないよう配慮していた。⁽³⁸⁾元朝で駙馬の地位は当然ながら一般朝臣の上にある。だからこそ一時において忠烈王やその父である元宗は上座を勧められ、恭愍王までひきつがれているのだが、結局、はじめ忠烈王はこのことを高麗王としての格式において確立できていなかったのである。

かかるずれば、つぎのようなことにも関わっているとおもわれる。「高麗史節要」卷一九、忠烈王元年五月には

王聞詔使來、出迎西門外。王既尙主、雖詔使、未嘗出城而迎。舌人金臺如元、省官語之曰。駙馬王不迎詔使、不爲無例。然王是外國之主也。詔書至、不可不迎。至是、始迎之。

とある。はじめ忠烈王は駙馬であることをもって詔使を城外で出迎えなかったのだが、元朝は「外國之主」である高麗王は必ず出迎えるように命じた。『經世大典』站赤（『永樂大典』卷一九四一九）、至元二九年正月七日の中書省の上奏には、「外國」の使節が福建に來着していたとあり、楊瑀『山居新話』卷二には、江浙行省の掾吏に現地の「土人」の任用が禁じられたことに對し、同行省左丞の佖住が、ならば中書省では「外國人」を任用することになると皮肉った、というエピソードがある。これらの「外國」が元朝境域外の國を指すことは明白である。元朝の官人魏初は、至元八年四月二四日の奏議のなかで、「外則交趾稱臣、高麗入貢、日本・江左（＝江東。ここでは南宋をさす）瞻望德化」と、高麗を交趾・日本・南宋とともに元朝の「外」としている（魏初『青崖集』卷四、奏議）、高麗の「外國」扱いも同様な意味合いと考えられる。忠烈王が駙馬となった後も、元朝総体に服属する「外國」という従来の格式が、高麗王について卓越していたのである。

かかる状況は忠烈王にとって好ましくなかったようである。同王四年（至元一五年、一二七八）、高麗では元朝の朝臣洪茶丘に結託した勢力が重臣金方慶の謀反を誣告し、釈明のため忠烈王は元朝に赴いた。その際、同王は達魯花赤や屯田經略司をはじめとする在高麗元軍の撤収を認められ、また駙馬の特権である站赤の筭子發給権を獲得するなどした⁽³⁹⁾。忠烈王は国内の統治権を高めるとともに、駙馬としての実体的な権限を求めていったと考えられる。

同年七月には「駙馬印」を「改鑄」されている（『元史』卷一〇、世祖本紀、至元一五年七月壬寅）。駙馬としての地位

が再確認されたのであろう。とはいえ、高麗は元宗以来、元朝から別に高麗「國王之印」をうけていたわけで、高麗王の地位と駙馬の地位とは、依然として別個に分離したままであった。

しかしながら、その三年後、『高麗史』卷二九、忠烈王世家、同王七年（至元一八年、一二八二）三月乙卯に

將軍盧英還自元。帝賜駙馬國王宣命・征東行中書省印。先是、王奏曰。臣既尙公主。乞改宣命益駙馬二字。帝許之。

とあるように、忠烈王は「駙馬國王」の宣命を請い、これを賜った。すなわち駙馬高麗國王の成立であり、『元史』卷一一、世祖本紀によれば同年二月辛未のことである。⁽⁴¹⁾

ただし『元高麗紀事』とこれに基づく『元史』高麗伝では、至元一五年七月に「改鑄」されたのは「駙馬高麗王印」であつたとする。しかし、一方では、双方ともその宣命の授与をやはり至元一八年二月としている。また翌至元一九年九月になつて「駙馬國王金印」が高麗にもたらされている。⁽⁴²⁾さらに『高麗史』卷二八、忠烈王世家でも、同王四年（至元一五年）七月壬寅の「駙馬金印」授与を伝えている。したがつて、至元一五年に「改鑄」されたのは、やはり単なる「駙馬印」であつたと判断してよい。

さて、『高麗史』忠烈王世家には、駙馬高麗國王の王号成立を伝える前掲記事に続き、その翌日の記事が

王與忻都・茶丘議事、王南面、忻都等東面。事大以來、王與使者東西相對。今忻都不敢抗禮。國人大悅。忻都等往合浦。（『高麗史』卷二九、忠烈王世家、同王七年三月丙辰）

とある。まずこの記事により、この時まで高麗王と元朝の朝臣は対等關係に準じた東西の席次で対していたことが

判明する。そして、駙馬の地位と高麗王の地位とが一体化した駙馬高麗国王という王号の成立にともない、これがあらためられ、高麗王が上位につく南面―東面の席次がとられるようになったことがわかる。

こうした地位向上のうらには、前掲史料にも「征東行中書省印」授与がみえているように、当時計画中の第二次日本攻略を高麗が遂行するという反対給付のしかかつていたとおもわれる。ともあれ、以上のような経緯をへてはじめて、高麗王の格式は元朝の駙馬として実体化していったと考えられよう。⁽⁴³⁾

五 高麗王位下の成立——むすびにかえて

元朝にとって、はじめ高麗は信のおける服属国ではなかった。それゆえ権臣林衍が元宗廢立事件をおこすと、元朝は高麗の廢絶までを考慮しながらこれに介入したのである。そうした高麗にとっては危機的な状況のなか、忠烈王はかえって公主降嫁という破格の優待をみずから申し出ることで、元朝への服属を明らかにし、王朝の生き残り事件の解決をはかった。一方、元朝も、対南宋戦が本格化した情勢を中心として、日本経略とのかねあいなどにもかんがみ、抵抗があなどれない高麗に対する強硬策を不利と判断し、忠烈王の要請を受けいれてこれを懐柔する方針をとった。かくして、高麗の服属が安定するのをまっけて、両国君主家の通婚が成立するのである。しかし、高麗王の格式が元朝の駙馬として実体化していくのは、忠烈王代はじめの段階的な交渉のすえ、同王七年に駙馬高麗国王の王号が成立してからと考えられる。

駙馬高麗国王の成立過程は以上のとおりである。それでは、そのような駙馬とはそもそも制度上いかなる地位を

意味するのであろうか。全体のまとめとして、この点について最後に述べておきたい。

モンゴルにおいて大カアン家の諸王・駙馬・公主・后妃や一部の功臣は分地分民をうけ、そうして形成されたそれぞれの分権的な政治勢力の単位を、投下（アイマク）といった。それゆえ投下はモンゴルの封建制とも評されるのだが、諸王・駙馬・公主・后妃の場合、他と区別してとくに位下とも称される。大モンゴル国の上部構造には、こうした諸投下の複合体、連合体としての一面があった。⁽⁴⁴⁾

高麗王に関しても、『経世大典』站赤（『永樂大典』卷一九四一九）、大德五年（忠烈王二十七年、一三〇一）二月の遼陽行省大寧路の上言では、管下の站赤疲弊の一因として「高麗王位下押運物貨駝駄」の過重があがつており、また『元高麗紀事』に、大德三年正月に丞相完澤が忠宣王を批判するなかで、「又嘗奉太后懿旨、公主（『忠宣王妃寶塔失里公主』與諫（『忠宣王』）兩位下怯薛^{ハシクタイ}併爲一、諫不奉旨」とある。高麗王もまた他の駙馬と同様に位下として位置づけられていたことは明らかであり、駙馬高麗国王に対する元朝の制度的な位置づけについては、第一にこの点を基本性格として捉える必要がある。つまり高麗王は、少なくとも形式上は元朝という国家を内的に構成する一分権勢力として存在するにいたったのである。⁽⁴⁵⁾

今後問題となるのは高麗王位下の具体的な内容だが、これについては投下としての実質性をいくつか指摘することができ。元朝朝臣との席次については前述したが、忠烈王は、同王二〇年（至元三年、一二九四）に成宗テムル即位のクリルタイの宴席にて諸王・駙馬のなか第七位に座し、⁽⁴⁶⁾六年後の只孫宴では第四位に座したという。⁽⁴⁷⁾高麗王の地位については「位同親王」（『高麗史』卷二二五、柳清臣伝）、「坐得次於雄吉刺臺」（『益齋乱藁』卷八、陳情表）と

いった同時代人の評価もみえている。また投下は大カアンより定例の歳賜と臨時の下賜をうけたが、忠烈王以降は高麗王も同様な歳賜をうけたらしく、忠烈王は成宗即位の際にオンギラト駙馬家やオンクト駙馬家の当主とともに多額の銀を下賜されている。⁽⁴⁹⁾ 何より、権力機構や所領支配についても元朝の他の諸王・駙馬に準ずる部分があったことは象徴的だが、これについては稿をあらためて詳論する予定である。

その一方で、高麗王に投下として特殊性が顕著であることも否定できない。とくに征東行省など元朝の関連諸制度や、高麗在来の王朝体制との相関関係は重要な検討課題となる。また大カアン家との通婚状況などを含めて他の諸王や駙馬との比較を行い、元朝における位相を相対的に把握することも不可欠であろう。こうした問題についても順次とりあげ、駙馬高麗国王の史的性格に対する理解を深めていきたいとおもう。

註

- (1) 周知のとおり、「大元」の国号が成立するのは一二七一年(至元八年)のことであるが、本稿では行論の煩瑣をさけて、クビライ即位の時点からその政権を元朝と称することにする。
- (2) 〔高、1977〕〔金成俊、1985〕〔金惠苑、1989〕〔張、1994〕〔鄭、1992〕〔周采赫、1989〕〔蕭、1983〕参照。
- (3) 以下の『元朝秘史』の現代日本語訳に関しては、〔小澤、1993: 75-77, 82-88〕に依拠している。
- (4) ソユルガルの意味内容については〔村上、1993c: 184-185〕参照。
- (5) 〔志茂、1995: 411, 431-432〕参照。
- (6) 『元朝秘史』第一四一節、および『元史』巻一、太祖本紀、歳甲子。
- (7) 〔磯野、1985: 63-65〕および〔村上、1970: 158〕参照。
- (8) 〔梁、1993: 153-154〕参照。
- (9) たとえば、『益齋乱藁』巻六、在大都上中書都堂書。

また忠肅王一〇年（至治三年、一三三三）に閔漬が忠宣王を弁護した上表文（『高麗史』卷一〇七、閔漬伝）。

(10) ただし高麗王家による質子の派遣は、両国の間で通婚が実施されるまさにその時点において、これを少なくとも建前のレベルで動機づけると同時に、かかる平和的な統属關係を保証し、実効せしめるための基盤として、すこぶる重要な意義があつたと考えられる。以上については稿をあらためて論じたい。

(11) 『高麗史』卷三五、忠肅王世家、同王八年十一月壬午。

(12) [池内、1981：26-27, 35-37] および [蕭、1983：234-235] 参照。なお高麗がかかる態度をとった原因としては、当時の権臣金俊を中心とした、政府内部における反モンゴル志向の残存を第一に指摘できる。ただし、権力をめぐる元宗と金俊の葛藤を基軸として推移した国内政局との相關を考慮すべきで、なお詳細なあとづけを要する点が多い。また高麗政府の財政状況に対する実証的評価も不可欠であろう。

(13) 『元高麗紀事』至元一五年春。

(14) 『高麗史』卷三一、忠烈王世家、同王二〇年五月甲寅につきのようにある。

(上略) 帝（＝成宗）嘗使翰林學士撒刺蠻問高麗歸附年

月。王使鄭可臣上書、以對曰。太祖聖武皇帝肇興朔方時、則有大勢國、助征金國、恃功而驕、不用帝命。有金山王子者、改其國號、自稱大遼、奪掠中都等處子女・玉帛、東走江東城拒守。朝廷遣哈眞・扎刺追討、時方雪深道險、糧餉不繼。高王（＝高宗）聞之、遣趙冲・金就勳濟兵犒師、殲其醜虜。因奉表請爲東藩。太祖遣慶都虎思優詔答之、大加稱賞、于今七十有六年矣。

(15) 『高麗史』卷二八、忠烈王世家、同王四年七月丁亥には「中書省令具錄本國累朝事跡及臣服日月、與帝登極已來使介名目・國王親朝年月、以呈。因國史院報也」とある。元朝の国史院による修史事業に際して、高麗帰服の年月が問題となる場合があつたようである。世祖が死亡して成宗が即位した直後にこの下問があつたのも、あるいは世祖代までに關する史書の編纂などと関わりがあるのかもしれない。

(16) ただし『高麗史』卷二五、元宗世家、同王元年八月戊申にはつぎのような記事がある。

大府少卿張季烈・將軍辛允和還自蒙古云。臣等詣新都開平府。（中略）帝曰。爾國事大國四十年、今茲朝會者八十餘國、汝等見其禮、待之厚、如爾國者乎。賜衣帛有差。世祖が中統初年、高麗が過去四〇年にわたって服屬してい

たかのように述べたわけだが、これは世祖の即位を慶賀するために派遣された高麗使に対する言である。当時、世祖は大カアン位継承戦にまだ勝利しておらず、正当性という点では必ずしも有利ではなかった〔杉山、1982〕。おそらくそうした事情から、即位の場に参集した高麗使に対し、世祖はかような温言を述べたのであろう。一時的にせよ、高麗の抵抗という事実を無視した言辞が、早くから元朝のトップによつて示されていたことが注目される。

- (17) それぞれ〔高、1977: 423〕〔金成俊、1985: 150-152〕〔金恵苑、1989: 165-169〕〔鄭、1992: 208-213〕〔蕭、1983: 234-237〕。

- (18) この墓誌銘の釈説に関しては、さしあたって〔金龍善(編)、1983: 423-425〕参照。

- (19) 以上の叙述は『高麗史節要』巻一八、元宗一〇年七月に基づく。

- (20) 『元史』巻六、世祖本紀、至元六年八月丙申・九月己未・一〇月丁亥の諸条。および〔池内、1931: 49-58〕参照。

- (21) 〔金恵苑、1989: 165-166〕および〔鄭、1992: 210-211〕参照。

- (22) 〔池内、1931: 52-53〕参照。

- (23) 〔金成俊、1985: 151-152〕〔金恵苑、1989: 168〕〔張、1994: 115〕〔鄭、1992: 212〕〔蕭、1983: 235〕参照。

- (24) 〔高麗史』巻二六、元宗世家、同王一〇年八月戊戌。

- (25) 註(12)所掲の〔池内、1931: 26-27, 35-37〕および〔蕭、1983: 234-235〕参照。

- (26) 〔高麗史』巻三二、忠烈王世家、同王の卒記に付された史臣の賛文。

- (27) 〔元高麗紀事』至元七年正月一五日および同年二月一六日。

- (28) 〔金恵苑、1989: 168〕および〔蕭、1983: 235-236〕参照。

- (29) 本稿では、元朝服属下における高麗の存続について、あくまで元宗廢立事件との関わりにかぎってあつかっている。このことは、もともと高麗帰服の際に世祖が承認し、のちには「世祖舊制」として高麗の既得権化した枠組みであり〔李、1986〕、当初より時時の政治情勢と(時には経済事情とも)密接に関係しつつ、結果的に維持されていたものである。その全体構造を説明するためには、そうした個別の経緯に加え、王の駙馬としての地位や征東行省といった枠組みとの関係を総合的に検討する必要があるとお

もわれる。今後の課題としたい。

(30) 『高麗史』 卷二六、元宗世家、同王二十二年二月甲戌。

(31) [李, 1986: 17-21] および [Henthorn, 1963: 194-226] 参照。ただし、同じく元朝が要求してきた戸口の登録については、元宗一〇年に「民戸」の「計點」が行なわれたことをその履行と捉える見解もあるが〔李, 1986: 19〕、

のちに忠烈王が「上國法」による「點戸」を元朝に願っていることからみて〔高麗史』 卷二八、忠烈王世家、同王四年七月戊戌〕、疑問である。

(32) 『高麗史』 卷二七、元宗世家、同王二十二年正月丙子。

(33) 『高麗史』 卷二七、元宗世家、同王二十二年一〇月辛丑。

(34) 『高麗史』 卷二七、元宗世家、同王二十五年五月丙戌。

一方、『元史』 卷八、世祖本紀では、至元二十一年五月丙申にこのことを記している。

(35) 以上が公主降嫁の実情であるとすれば、実際にこれが行なわれた際、由来がどのように説明されたかが問題となる。ここで論じる余裕はないが、若干の見通しについて、註(10)を参照されたい。

(36) 『元史』 卷六七、礼樂志の序文につきのようにある。

元之有國、肇興朔漠、朝會燕饗之禮、多從本俗。太祖元年、大會諸侯王于阿難河、即皇帝位、始建九斿白旗。世

祖至元八年、命劉秉忠・許衡始制朝儀。自是、皇帝即位、元正・天壽節、及諸王・外國來朝、冊立皇后・皇太子、羣臣上尊號、進太皇太后・皇太后冊寶、暨郊廟禮成、羣臣朝賀、皆如朝會之儀。而大饗宗親、錫宴大臣、猶用本俗之禮爲多。

(37) [岡安, 1983: 3-9] および [奥村, 1984] 参照。

(38) 『高麗史』 卷二八、忠烈王世家、同王元年一〇月庚戌。

(39) 『高麗史』 卷二八、忠烈王世家、同王四年七月甲申・壬辰・戊戌の諸条。

(40) 『高麗史』 卷二五、元宗世家、同王元年八月壬子によると、即位してほどなく元宗に下された世祖の詔のなかに「今賜卿虎符・國王之印、并衣段弓刀等物」とある。『元史』 卷四、世祖本紀、中統元年六月の是月条にも、元宗に「國王封冊・王印及虎符」を賜ったことが記されている。

(41) 『元史』 卷一〇八、諸王表では駙馬高麗國王の始封年次について、「至元」のみを記して年数が欠字になっている。中華書局標点本の校勘記では、忠烈王が公主を降嫁され即位した至元二十一年をあてているが、当然ながら至元十八年が正しいということになろう。

(42) 『高麗史』 卷二九、忠烈王世家、同王八年九月甲子。

(43) ただし高麗に対する「外國」視はその後に残っている。

高麗の官人李穀が元朝に対して自国を「外國」と称したほか（李穀『稼亭集』巻八、代言官請罷取童女書）、高麗使金之淑が元朝にて「諸侯王之列」に列せられず、交趾国と席次を争い（『高麗史節要』巻二一、忠烈王二十二年六月）、また泉州に赴いた高麗王の商船が「海外不臣之國」と同率の商税をかけられそうになるなどのことがあった（『牧庵集』巻一六、福建行省平章政事史公神道碑）。

- (44) 投下の制度的概念については、さしあたって（安部、1972）〔岩村、1968〕〔植松、1966〕〔海老沢、1966〕〔愛宕、1968〕〔小林、1963〕〔周藤、1968〕〔松田、1976〕〔村上、1993〕〔周良霄、1983〕などを参照。

- (45) かつて周采赫は、高麗王が他のモンゴル諸王と同様な「分封地」の「藩王」となった可能性を推測したが（周采赫、1989: 28）、高麗王位下という枠組みのかぎりにおいて、結果としては妥当であろう。

- (46) 『高麗史』巻三二、忠烈王世家、同王二〇年四月甲午。
(47) 『高麗史』巻三一、忠烈王世家、同王二六年六月壬子。
(48) 『元文類』巻一一、高麗国王封曾祖父母父母制には、忠烈王について、「初由世子、已帝女之降盃、旋俾嗣王、非公孫之復始。遂罷時貢其方物、顧同歲賜於宗親、實秉鈞」とある。

- (49) 『元史』巻一八、成宗本紀、至元三二年四月乙巳にすぎのようにある。

賜駙馬蠻子帶銀七萬六千五百兩、闕里吉思一萬五千四百五十兩、高麗王王昀三萬兩。

文献表

安部 健夫 1972 「元代「投下」の語源考」『元代史の研究』

創文社、東京

池内 宏 1931 「元寇の新研究」東洋文庫、東京

磯野富士子 1985 「アング考」『東洋学報』六七・一・二

岩村 忍 1968 「封建的領地制」『モンゴル社会経済史の研究』京都大学人文科学研究所、京都

植松 正 1966 「元代江南投下領の分賜について」『史窓』

五三

海老沢哲雄 1966 「元朝の封邑制度に関する一考察」『史潮』

新九五

岡安 勇 1983 「中国古代史料に現れた席次と皇帝西面

について」『史学雑誌』九二・九

奥村 周司 1984 「使節迎接礼より見た高麗の外交姿勢—

十一、二世紀における対中関係の一面」『史観』一一〇

小澤 重男 1993 『元朝秘史全訳統攷（下）』風間書房、東

- 京
- 愛宕 松男 1988 「元朝の対漢人政策」『愛宕松男東洋史論集(四)―元朝史』三一書房、東京
- 小林高四郎 1983 「元朝投下考」『モンゴル史論考』雄山閣出版、東京
- 志茂 碩敏 1995 「モンゴル帝国史研究序説―イル汗国の中核部族」東京大学出版会、東京
- 杉山 正明 1982 「クビライと東方三王家―鄂州の役前後再論」『東方學報』五四
- 周藤 吉之 1969 「唐宋資料に見えたる頭項・頭下と探馬―遼・元の投下との関連に於いて」『宋代史研究』東洋文庫、東京
- 松田 孝一 1978 「モンゴルの漢地統治制度―分地分民制度を中心として」『待兼山論叢(史学)』一一
- 村上 正二 1970 「モンゴル秘史―チンギス・カン物語(二)』平凡社、東京
- 村上 正二 1993a 「元朝における投下の意義」『モンゴル帝国史研究』風間書房、東京
- 村上 正二 1993b 「チンギス汗帝国成立の過程」『モンゴル帝国史研究』風間書房、東京
- 村上 正二 1993c 「モンゴル朝治下の封邑制の起源―特に Soyut'al 及 Qubilay との関連について」『モンゴル帝国史研究』風間書房、東京
- 高 柄翊 1977 「元과의 關係の 變遷」『한국사(七)』국사편찬위원회、서울
- 金 成俊 1985 「高麗後期 元公主出身王妃의 政治的地位―특히 忠宣王妃를 중심으로」『韓國中世政治法制史研究』一潮閣、서울
- 金龍善(編) 1993 「高麗墓誌銘集成」翰林大學校아시아文化研究所、春川
- 金 惠苑 1989 「麗元王室通婚의 成立과 特徵―元公主出身王妃의 家系를 중심으로」『梨大史苑』二四・二五
- 梁 義淑 1993 「高麗 禿魯花에 대한 研究」『素軒南都泳博士古稀紀念歷史學論叢』民族文化社、서울
- 李 益柱 1996 「高麗・元關係의 構造에 대한 研究―소위 世祖舊制의 분석을 중심으로」『韓國史論(서울大)』三六
- 張 東翼 1994 「高麗後期外交史研究」一潮閣、서울
- 鄭 容淑 1992 「元公主出身왕비의 등장과 정치세력의 변화」『고려시대의后妃』민음사、서울
- 周 采赫 1989 「몽골고려사 연구의 재검토―몽골고려사의 성격 문제」『國史館論叢』八

- 蕭 啓慶 1983 「元麗關係中的王室婚姻與強權政治」『元代史新探』新文豐出版公司、台北
- 周 良霄 1983 「元代投下分封制度初探」『元史論叢』二
- Henthorn, W. E. 1963 *Korea: The Mongol Invasion*, E. J. Brill, Leiden.

駙馬高麗国王の成立 森平

第七十九卷 三七三